

# Interview

## 駐日ラテンアメリカ大使 インタビュー

第22回 ハイチ共和国

ルイス・ハロルド・ジョセップ  
駐日ハイチ共和国大使

### 日本の援助を高く評価

— 貿易・投資の促進にも期待 —



ハイチのルイス・ハロルド・ジョセップ大使は、このほどラテンアメリカ協会のインタビューに応じ、日本との二国間関係、日本の対ハイチ援助、新政権の発足、ハイチ経済の課題、ハイチ文化等について見解を表明した。

ジョセップ大使は通商・産業省経済・分析サービス長、在米大使館書記官、公使・参事官、駐バハマ大使、駐米大使などを経て2016年9月より現職。

インタビューの一問一答は次のとおり。

— 大使は日・ハイチ国交樹立60周年の記念すべき年(2016年)に日本に赴任されましたが、感想は如何ですか。

**大使** 2016年はまさにハイチ共和国と日本の国交樹立60周年に当たりました。この60年間の二国間関係は極めて友好的かつ緊密な協力を支えられてきました。我々としてはこの関係をさらに強化するよう努めたいと思います。

日本人はその生活においてもビジネスにおいても極めて規律正しい国民であること、また日本人の聡明さ、進取の気性および仕事に対する愛情は広く世界的に知られています。これらの特性があいまって日本は第2次大戦後あれほどの短期間に世界の経済大国となりました。ハイチ国民は日本国民を尊敬し、高く評価しており、日本の経験から学ぶことは実に多いと考えています。

— ハイチと日本との二国間関係の現状をどう見ておられますか。

**大使** 近年、ハイチと日本の関係はますます強化されています。これは両国の政府関係者の往来や事務量の増大からも明らかです。また、日本国民と政府は常にハイチの立場に立って同国の経済社会開発のための支援を極めて積極的に実施されています。ハイチが困難に陥ったとき、特に2010年1月12日の地震の際、また去る10月のハリケーン・マシューの際も、日本は常にハイチ救援のために率先して手を差し伸べてくれた国の一つでした。ハイチの政府と国民を代表し、また私個人として、この機会に日本の絶えざる支援と厚い同情心に対し感謝の気持ちを表したいと思います。

— 外交官としての豊富な経験を活かし、今後日・ハイチ関係をどのように発展させていきたいとお考え

ですか。そのため、日本に求めるものは何でしょうか。

**大使** 1986年にハイチの独裁政治が終焉して以来2016年まで、ハイチは民主化の道を静かに歩み続けてきました。ハイチ人が行ったそのような政治的選択が目に見える形で成果を出すためには、経済の成長と発展のレベルの向上がともなわなければなりません。ハイチのすべての国民が民主主義は経済的な変革をもたらしたと感じなければなりません。

また、私は駐日大使としての在任中には貿易に注力したいと考えています。ハイチは日本から直接あるいは間接的に多くの製品を輸入しています。トヨタ、ホンダ、日産、スバル、三菱、ソニー、パナソニック等々、主な日本のブランドはすべてその代理店があります。

日本の外務省から受け取った統計によれば、15年のハイチの対日輸出は352百万円（衣類、コーヒー、アルコール飲料）で輸入は5,020百万円でした。従って我々の対日貿易収支を改善する必要があります。つまり私の主たる目的は、一方でハイチの対日輸出を、また他方では日本ないしアジアの対ハイチ投資を促進することです。私は先ず高地で栽培されるハイチのグルメ・コーヒーおよびココア並びにエッセンシャル・オイル（精油）のような農産品の輸出促進から始めたいと思います。日本人は高品質の産品を愛されますので、これら3品目の日本におけるポテンシャルは極めて有望でしょう。

我々はまたハイチへの外資誘致に関心があり、特にアジアからの組み立て工場の移転を奨励したいと考えています。ハイチは新規の会社設立に利便を提供する法制があり、また米国から飛行機で2時間という立地条件にあります。

**— 10年1月のハイチ大地震を受け、我が国は自衛隊施設部隊をハイチPKOに派遣しました。また最近では、ハリケーン・マシューによる被害に対し、緊急援助物資（テント等）の供与と300万ドルの緊急無償援助を実施しました。これまでの日本の協力に対するハイチ側の評価はいかがでしょうか。**

**大使** 自然災害の面では日本とハイチはとても似ています。両国とも地震とハリケーン、すなわち台風の脅威に晒されています。前述のとおり、日本はハイチが受けた自然災害に対しいつも多額の援助を供与されてきました。人命の喪失は我々みなに関心事項です。日本在任中に自然災害対策に対して日本が

有している広範な専門的知識や技術をハイチが学べるようにできる限りの努力をしたいと考えています。

**— ハイチ大統領選挙の結果が臨時選挙審議会によって発表されたようですが、ハイチの現在の政治状況と今後の見通しについてはいかがでしょうか。**

**大使** 17年1月3日、昨年11月28日に行われた大統領選挙の結果が発表され、ジョブネル・モイーズ候補が大勝利を収めました。同候補は1回目の投票で決まると憲法で定められた過半数プラス1のマジックナンバーを遥かに超える55.6%の得票で当選、2位のジュード・セレスティン候補（得票率19.57%）を大きく引き離しました。モイーズ候補は2月7日に就任しますが、当選後の最初の声明で、実務的なすべてのハイチ人の大統領になる旨強調しました。同氏はこれまで欧州向けにバナナを輸出する大企業（Agritrans）のCEOでした。選挙キャンペーン中に主張していたとおり、農業を特に重視すると見られています。ハイチ国民の50%以上が農業に依存しているにもかかわらず、これまでの政権は農業を軽視してきました。16年11月20日の選挙は正しい方向を目指しての新たな一歩となり、それは明らかにハイチの民主主義の強化につながるでしょう。

**— ハイチ経済の現状と今後の見通しは如何ですか。また、ハイチの今後の開発のための課題は何でしょうか。**

**大使** ハイチの経済状況は理想からほど遠いものです。過去10年間に何度かの自然災害（地震、洪水およびハリケーン）に見舞われ、国民を痛めつけました。ハイチのほとんどのインフラは耐震およびハリケーン対策の基準に沿って再建される必要があります。さらに現下の最大の挑戦は人口過剰、教育、医療およびインフラ不足です。選挙戦中、各候補のこれらの問題に関する考え方を我々は注視してきました。我々は選挙に勝利したジョブネル・モイーズ氏がこれらの挑戦に打ち勝つことを誓うと信じています。我々は未来を信じており、ハイチの未来は平和と安定と繁栄であると信じています。

**— ハイチには世界遺産やハイチ・アート (Haitian Art) があります。アンドレ・マルローがハイチ絵画を絶賛し、また“魔術的リアリズム”の先鞭を担ったキューバの作家アレホ・カルペンティエルは**

1949年の『この世の王国』でハイチ革命を描いています。いくつかのハイチの文学作品も日本語に訳されています。ハイチの魅力をどのように日本に伝えていきたいと思っておられますか。

**大使** 私は世界のいろいろな国を訪れました。そして人々が小さなもの、あるいは取るに足らないと思われる事実を取り上げ、それらをいかに崇高なものに変えるかを見てきました。人生におけるあらゆる対象物ないし事実の一つの物語を持っています。その物語をどう語るかによってこの単純な事実ないし対象物が壮大なものあるいは崇高なものになり得ます。ハイチには世界に語るべき素晴らしい物語があります。我々はそれをいかにより良く知って貰うかを学ばなければなりません。

ハイチには国内および国外に多くの知識人および芸術家があります。我々は日本におけるハイチ文化の普及のためこれら才能のある人たちを活用したい。それを念頭に置きつつ、両国間の文化交流を強化するための努力を怠らないようにしたいと思っています。

— 日本には30名近くのハイチ人が在留されているようですね。最近テニスで活躍する大坂なおみさんの父親はハイチ出身と聞きます。

**大使** 大坂なおみさんは父親がハイチ人、母親が日

本人の新進スターです。彼女の活躍ぶりは何度か日本のプレスでも海外でも取り上げられました。私も彼女に会い、試合も見たいと思っています。私は彼女が元カナダ総督、現フランコフォニー国際機関(OIF)事務局長のミカエル・ジャンやフランス・アカデミーのダニ・ラフェリエル、あるいは著名な著述家エドウィージ・ダンティカや国際的に絶賛されているミュージシャンのワイクリフ・ジョンのように世界中にハイチの名を広める存在となってほしい。特にハイチについて未だあまり知られていない日本においてハイチを売り込むことに大いに貢献してくれることでしょう。

— 『ラテンアメリカ時報』の読者に対してなにかメッセージはありますか。

**大使** ハイチ共和国はラテンアメリカおよびカリブ諸国と緊密に協調してきた長い伝統があり、二国間関係においても多国間関係においてもこの伝統は維持してゆきたいと考えています。日本に着任して、ラテンアメリカ協会の存在を知って喜んでいます。日本とラテンアメリカおよびカリブとの関係促進のため我々としても微力を尽くしたいと考えています。

(インタビュアー ラテンアメリカ協会副会長 伊藤昌輝)

## ラテンアメリカ参考図書案内



### 『資源国家と民主主義 —ラテンアメリカの挑戦』

岡田 勇 名古屋大学出版会  
2016年9月 386頁 6,800円+税 ISBN978-4-8158-0848-8

今世紀初頭の資源価格の上昇によって石油・天然ガス・金属資源輸出国は大きな「資源レント（余剰価値）」を得た。その配分をめぐる国家と市民の間で利益配分や採掘地住民への環境問題にともなう係争が生じ、政治参加が盛んになった。新自由主義政策に反発する市民等の抗議運動、政治参加から誕生した左派政権は、ラテンアメリカにおいて奇しくも資源生産国であった。資源ブームの到来は国庫収入不足、債務問題、国営企業の非効率を忘れさせ、望ましい資源政策とその可能性についての考察が真剣になされなかったことが、その後の資源価格下落で明らかになってきた。

本書は、資源レントの利益配分、採掘をめぐる環境悪化等の不利益配分をめぐる抗争を、ペルー、ボリビアの鉱山紛争や先住民政治参加などの具体的事例を挙げて比較することで、特に国家・外資・採掘地住民という利害関係者間の中での安定的な資源管理のための合意形成が鍵であるが、特にそれらの中でも住民・市民団体の交渉力に着目してその政治参加と望ましい資源政策とは何か？を探究した優れた労作。著者は在ボリビア大使館専門調査員を経て、現在は名古屋大学大学院准教授。 (桜井 敏浩)



## 『ポーラースター ―ゲバラ覚醒』

海堂 尊 文藝春秋

2016年6月 454頁 1,750円+税 ISBN978-4-16-390466-5

後にフィデル・カストロとキューバ革命を達成することになるアルゼンチン生まれのエルネスト・ゲバラが、医学生時代の学生運動の議長を務めた同級生ピュートル・コルダと12月の卒業試験の後3月の医師国家試験までの休暇を利用して、チリ、エクアドル、コロンビア、ペルー、ボリビアへの南米縦断の旅とその前後の生き様を描いた小説。

ぼく（エルネスト）のママン（母）のサロンには多彩な人士―後にボリビア、チリ大統領になるバス＝エステンソロとフレイ、アルゼンチンの詩人ボルヘス等が入りし、高校時代には地方巡業に来た駆け出し女優時代のジャスミン・エバドゥアルテ―後にペロン夫人―とのその後彼女の死の直前まで続く関わりが生まれ、ペロン副大統領を招いての大学講演会でのペロン自身との論戦に始まる出会い、軍事クーデターで逮捕されたペロンをその秘書兼愛人となったエバに協力して復権させ、交換に過激な学生運動の主導者として拘束されたピュートルを釈放させたことから、彼との南米周遊の旅立ちに至る。

アンデス山脈を越えてチリでは、後の大統領アジェンデや詩人のパブロ・ネルーダに会うなどして、ついに当初の最終目的地であるペルー北部アマゾンのハンセン氏病療養所に着き二人は一週間手伝うが、ピュートルは看護婦のマリアと将来を約束する。帰途に就いた二人はヒッチハイクでマチュピチュ遺跡に向かい、チチカカ湖を経てブエノスアイレスまで列車が出ている首都ラパス近くまで到着したところで、錫鉱山で労働争議が起きていることを知り、ストライキ見学のつもりで山道に入る。途中鉱山から逃れてきた労働運動の指導者から現地の言葉も事情も判らぬ若者に労働者の手助けは出来ないし、危険だと制止されたのを振り切って先へ進んだ二人だが、ピュートルは地雷を踏んで落命し、冒険旅行にピリオドが打たれた。ブエノスアイレスに戻って医師国家試験に合格したが、旅立ちの予感が続くある日、ジャスミンから呼び出され合格祝いを贈られるが、彼女が癌で余命いくばくもないこと、自分の死後ペロンは暴走するだろうことを告げられ、互いのピアスを片方ずつ交換する。はたして翌朝大統領官邸のバルコニーでの最後の演説後に斃れた姿をみたぼくはその二日後ママンにも別れを告げずにアルゼンチンを後にしたが、目を閉じるとその鼻腔には硝煙の香り、革命の匂いが漂ってきた。

著者は医師にして『チーム・バチスタの栄光』など多数の著作がある作家。百数十冊のラテンアメリカ関係邦文文献により現代政治史に登場する人物や詩人・文学者などについてもよく調べた上で、一気に読ませる筆力はさすがである。〔桜井 敏浩〕